

特集

園芸なんかで メシが食えるか

■問合せ先／花と緑・観光課
(☎ 33-3131 内線 2521)

長い歴史を持つ恵庭の「花」。今年も花のイベント「恵庭・花とくらし展」の開催や市民の手による花植えにより、恵庭のまちは花いっぱいになります。

今後多く市民の手で「花のまちづくり」を進めるために一。今月の特集では、恵庭の花のまちづくりの歴史を振り返りながら、今後必要なことは何か、私たちができることは何か、などについて考えます。

「花のまち」恵庭は、 定時制高校の温室から始まった。

初夏の訪れ。恵庭のまちで見られる花の風景。市内の至るところに、きれいに整備された花壇を目にしますね。

しかし、花壇は全国どこにでもあるものでしょうか？ 始まりは昭和36年にさかのぼります。当時、花の栽培を始めた藤井哲夫さん（故人）の生前の話を基に紹介します。

きっかけは、定時制課程農業科のある北海道恵庭高等学校（現・恵庭北高等学校）に昭和36年にできた小さな温室。こ



こで花の実験栽培が行われ、実習助手をしていた卒業生が藤井さんたちに花の生産を勧めたことが始まりです。

恵庭ゆかりの中山久蔵が寒地稲作を普及させ、米づくりが長く農業生産の中心だった恵庭。当時、藤井さんと一緒に花の生産を始めた石田貢さん（中央在住）は教諭から「水田の真ん中で花は作れない」と言われます。「園芸なんかでメシが食えるか」と反対された時代でした。それでも「冬から春にかけて生産できる」花苗に魅力を感じ、新たな挑戦に意欲を燃やす藤井さんたちはシクラメンを育て、札幌で鉢植えを売り歩きました。

その後、藤井さんたちは春に出荷できる花壇苗の栽培も開始。次第に「恵庭の苗は寒さに強い。花が長持ちする」と評判になり、昭和40年代には花苗の生産が拡大しました。

昭和59年には恵庭市花苗生産組合が設立され、恵庭は道内でも有数の花苗の生産地に。今では、平成20年の洞爺湖サミットや札幌市の大通公園をはじめ、恵庭産の花苗がさまざまなところで使用されています。

藤井さんたち農業青年が、周囲の反対にも負けずに始めた花の栽培。その努力が実を結んだのです。

花まちづくりの歩み

1961
(昭和36)年

● 恵庭市花いっぱい文化協会が設立

1984
(昭和59)年

● 恵庭市花苗生産組合が設立

1990
(平成2)年

● 第1回「恵庭・花とくらし展」開催

● 花づくり愛好会が「花のまちづくりコンクール(団体の部)」建設大臣賞を受賞

● 恵み野西商店会が「北海道花と緑のまちづくり賞」を受賞

1995
(平成7)年

1996
(平成8)年

● 花のまちづくりプランを策定
● 恵庭花のまちづくり推進会議が設立

1998
(平成10)年

● 恵み野花の街づくり団体連合会が都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」を受賞

2004
(平成16)年

● 花のまちづくりプランを改訂

2008
(平成20)年

● 恵庭市花いっぱい文化協会創立50周年

● 恵庭市が(社)日本観光協会「花の観光地づくり大賞」を受賞

2010
(平成22)年

● 恵み野商店会が「緑の環境デザイン賞」国土交通大臣賞を受賞

2015
(平成27)年

市民主導で行ってきた
恵庭の「花のまちづくり」。

恵庭で生産した花で、まちを花いっぱいにすることを目的とする「花いっぱい運動」。これも昭和36年、秋田県出身の7人の市民有志が「恵庭市花いっぱい文化協会」を設立して始まりました。これまで花壇の整備や植栽、花壇コンクールを実施するなど、長年にわたり花や緑の普及活動を行っています。
また、市内の商店会が自ら花壇の整備



を行い全国的な賞を受賞していることからも、恵庭における花のまちづくりの特徴は、花の生産や花植えが行政主導ではなく、市民主導により行われていることと言えるでしょう。

市民自らの「花いっぱい運動」により、恵庭は「花のまち」として全国に知られるようになりました。



ガーデニングが、人と人との つながりを生んだ。

花苗の生産拡大や市民主導の花植えなどが定着し、生産者と市民との交流も深まってきた平成2年、市制施行20周年の記念行事として、市は「恵庭・花とくらし展」を初めて開催。これを機に、花でまちを彩る活動は市内全体に広がりました。

平成3年には市民有志が、世界でも有名なガーデンシティであるニュージブランドのクライストチャーチ市を視察。自宅の庭がそのまま美しいまちの景観になることを知った市民は、ガーデニングを生かしたまちづくりを意識するようになります。この頃から、恵庭では恵み野地区を中心にガーデニングの愛好者が増え、ガーデナー同士の交流が深まりました。

また、市民が自ら資金を集めて市有地を花壇にしたり、商店街や企業による植栽やプランターの設置などに取り組んでいる活動も見逃すことできません。

このように、ガーデニングをはじめとする花いっぱいのもちづくり活動により、花が人と人との「つながり」を生んだのです。



恵庭に住んでいるからには 市民が花に関わる環境を作りたい

— 「花のまち・恵庭」の魅力は？

学校や公園に花を植えて管理する人、庭をきれいにする人、花の情報を発信する人など、まちの「花」について考える人、行動する人が多い。それが「花のまち」恵庭の魅力です。

— 恵庭の観光に関する「花」の役割は？

オープンガーデンなどにより、「花」は恵庭の観光の目玉となっています。観光客には、もっと恵庭の素敵な花の風景にめぐり合い、花に携わる市民とふれ合ってほしい。そのためにも、「花」を通じてふれ合う拠点ができることを期待します。

— 「花のまち・恵庭」にとっての課題は？

市民が、もっと気軽に花のまちづくりに関わることでできる仕組みが不足していると思います。ガーデナーや市民ボランティアに頼るだけでなく、次の世代につなげていくための仕組み作りが必要だと思います。

— 恵庭が将来的にも「花のまち」であり続けるためには？

時代に合った「花のまちづくり」に変化し続けること。今と同じことをするのではなく、次世代の人が自由な発想で仕掛けを考え、アイデアを具体化していく。また、それを応援する環境を作ることが「花のまちづくり」を継続するための力になります。私たちは「花のまち」恵庭に住んでいることを、誇りを持って言えるような市民でありたいですね。

恵庭・花・人 Interview

恵庭花のまちづくり推進会議副会長
恵庭市フラワーマスター協議会

つちや 土谷 美紀 さん



恵庭に咲き誇る「花」は、
人と人をつなぐ「絆」です

第2期恵庭市観光振興計画における
「花のまちづくり」の位置づけ

第5期
恵庭市総合計画

「花・水・緑 人がつながり
夢ふくらむまち えにわ」

えにわ花の
まちづくりプラン

「花もよし 風もよし
人もよし ここが恵庭」



第2期恵庭市観光振興計画

基本理念

「花のまち 恵みの庭を育む
観交まちづくり」

基本方針

基本方針3 魅力ある観光地づくり
／基本施策3-1 観光資源の魅力向上

■花観光の推進

オープンガーデンと、新たに整備する花の観光拠点を連携させ、恵庭らしい花観光を確立する。

- ・オープンガーデンの案内機能の充実
- ・「花とくらし展」の充実
- ・花のまちづくりに係る市民活動への支援
(次世代の人材育成と、花のまちづくりの意識醸成)
- ・花ガイドなどの市民ボランティアの育成
- ・来訪者と地域住民との交流機会の充実

「花のまちづくり」は、恵庭の観光における転換点となった。

花は、これまで個人の庭や商店街を彩るものでした。しかし平成18年、恵庭に道と川の駅「花ロードえにわ」と花の大テーマパーク「えこりん村」が相次いで完成。これが、恵庭にとって「花」をテーマとした観光地としての転換点となりました。

それまで年間40～50万人程度だった観光客数は急増。毎年120～130万人

の人が恵庭を訪れ、「花」は恵庭の観光の目玉となりました。花のシーズンには、多くの観光客が花を目当てに恵庭を訪れます。

市民による花壇整備やガーデニングを見せる行動は、日常生活の中での景観。当初、恵庭では「花」で観光地化や経済の活性化を図ろうという考えはなかったはずですが、しかし、この景観が多くなるとして魅力あるものとなったことが、恵庭の観光振興につながったのではないのでしょうか。



観光客の心をつかんだ「花」。観光の振興により、市内店舗の利用客の増加や雇用の増加が期待でき、地域の活性化にもつながります。

市が平成28年に策定した「第2期恵庭市観光振興計画」。この計画では、今後の観光振興につなげるために、市民による歴史ある取り組み「花のまちづくり」をキーワードとしています。

また、恵庭ならではの「花のまちづくり」の特徴を生かしながら持続するために、人づくりと観光振興を一体的に推進することを基本理念の一つとし、市民と観光客とがふれあう「花の観光拠点」の整備についても盛り込まれています。

第5期総合計画や花のまちづくりプラン、観光振興計画の基本理念は、どれを見ても「花」という言葉が最初に出てきます。これは、恵庭が「花のまち」ということの表れですね。

観光の目玉にもなった「花」。恵庭の魅力は？と聞かれたとき、胸を張って「花のまち」と言えるようなまちであり、市民でありたい。しかし、恵庭が将来的に「花のまち」としてまちづくりを進めるためには、いくつかの課題があることも事実です。

花を広げるきっかけを作りながら、
市民の花に対する思いをつなげたい。

花と緑・観光課

主事 藤原 裕太



恵庭では「花いっぱい文化協会」と「花のまちづくり推進会議」という2つの団体を中心として、多くの市民が花のまちづくりに関わっています。今後、花の活動をもっと広げ次の世代につなげるためには、まずは花に興味・関心を持つ人を増やすこと。市は、花に関する活動の紹介やイベントの開催などを通じて、特に若い人が花に関わるきっかけ作りができれば、と考えています。

花に携わる人たちを大切にしながら、その人たちの思いを次の世代に伝えていきたい。いつまでも花が恵庭市民の心の財産であり、花も市民も輝き続けるような「花のまちづくり」を推進していきたいですね。

「花のまちづくり」を続けるために、必要なことは何か。

恵庭の弱みは、まず花の観光資源の大部分をオープンガーデン（個人の庭）に依存していること。もっと観光客が気軽に花にふれ合う場所が必要です。

次に、花のまちづくりに携わる市民の担い手不足も進んでいること。市民ボランティアで行う「花ガイド」をはじめ、次世代の花に携わる人材の育成なども行っていかなければなりません。



これらの課題を解決しなければ、恵庭は将来的に「花のまち」としてあり続けることは難しいかもしれません。

恵庭のまちは読んで字のごとく、花いっぱい（はないっぱい）の庭に恵まれた「恵みの庭」。今まさに、花に携わる市民を増やすこと、花の拠点を整備すること、人材を育てることなど、花に関する新たな仕組みづくりが求められています。



市民が誇る「恵みの庭」は、「花のまち」という道を進む。

昭和36年、温室での花の栽培や花いっぱい文化協会の設立などがきっかけとなり、「園芸なんかでメシが食えるか」と笑われてから50年あまり。今では「花のまち」は恵庭の代名詞となりました。

「花」は、市民の日常生活の中にあるもの。恵庭では町内会・自治会などの地域団体をはじめ、市民による花をいっばいにする活動が盛んに行われています。

また、恵庭は自宅の庭に花を植える家庭も多く、また市内の小・中学校でも花壇整備が行われています。平成27年には柏陽中学校の土曜授業でも花植えが行われるなど、花は学校生活の一環にもなっており、子どもたちの花に対する意識の醸成に期待がもてます。

これまで花に携わることのなかった人も、地域活動への参加をきっかけにするなど「花のまちづくり」の第一歩を踏み出してみませんか？

恵庭に住む私たちが、「花のまち」について市民同士で夢を語り合うことができたなら。今後、いつまでも花と緑あふれる恵庭で、日常生活を送っていききたいですね。